所感

長崎市議会議員　奥村 修計

関係諸氏のご努力とご配慮により、ポルト市・ヴォスロール村姉妹都市提携40周年及びライデン市姉妹都市提携を記念し、それぞれの地を訪れる機会を得て、長崎が世界史に及ぼした役割、またこれらを起点とした長崎の活性化策について、次のような所感を得た。

1600年から始まる日本とオランダの関係は、平戸オランダ商館時代、出島時代、そして近代に至るまで非常に良好であった。この痕跡は、江戸後期にオランダ政府から「可能な限り日本についての情報を集めよ」と命を受けて出島に送り出されたシーボルトが、日本で収集した、浮世絵・漆器・陶磁器など数々の逸品を展示したシーボルトハウス、オランダで最も古い歴史を有し同氏の日本で採取した植物を有するライデン大学の植物園、同じく日本で収集した家事用品や木版画、道具類をオランダ初代国王ウィレム1世に寄附したことを端緒とする国立民族学博物館に詳しく、長年に亘る両国の友好の歴史を今に伝えている。

しかし、残念ながら先の第二次世界大戦は、長きに亘る日蘭関係に、一瞬のうちに断絶をもたらした。その関係修復を図るスキームが「サンフランシスコ講和条約」であり、その具体策の一つがオランダ政府が日本に求めた出島の復元である。その過程において、昨年11月24日出島表門橋が完成し、オランダ王室・政府関係者隣席のもとに渡り初めが行われた。出島の復元は、昭和26年に始まった大プロジェクトであり、ここまで来るのに66年、おおよそ「3分の2」世紀を費やしてきたが、視察先で目の当たりにした大戦以前の日蘭関係の良好な関係に思いを馳せれば、出島の復元も道未だ半ばであり、シーボルト記念館の更なる活用を含め、さらなる取り組みの充実化が急務であることを改めて認識することとなった。出島表門橋の完成と間を隔てずにオランダ訪問の機会を得たことは、平和を祈念する長崎市政に携わる者にとって何にも代えがたい貴重な経験となるとともに、今後の政務活動方針においても非常に有益なものとなった。

また、禁教令が解かれた後にカトリック司祭として外海地区を訪れたド・ロ神父の生誕地であるヴォスロール村への視察においては、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」に関連して、今の自由な日本に暮らしていると、潜伏キリシタン時代において、信者に対して弾圧が行われていたことなど俄かに信じられないものであるが、ド・ロ神父が実際に生まれた場所に立ち、長崎とキリシタンの歴史を振り返る時、信じる対象を持った人の思いが実に強いものであることを再確認することができた。さらに、この思いを被爆地という悲しい歴

史も含めて考えたとき、長崎という地が、人間がより人間らしく生きようとする崇高な場所であり、世界中の人々が平和への思いを共有し得る非常に貴重な場所であるということを改めて思い知ることとなった。

一方で、地方創生の時代にあって、その重点施策である観光立国面では、外国人観光客を地方に誘導することが最重要課題となっている。ここで問題になるのが日本の観光地の知名度であろう。その証左として、海外に知られている日本の観光地は、ゴールデンルートと呼ばれる東京から関西圏のごく限られた地域であり、経済効果も限定的である。この原因の一つは、長崎を含め地方における観光立国への取り組みの遅れ、情報発信の遅れである。

これまでの観光の取り組みは、雄大な景色、自然、日常では経験できないもの、言い換えれば「非日常の空間・体験」が、観光資源として多く扱われてきた。長崎の場合、異国情緒あふれる街の景色や海などの自然、夜景などがこれにあたり、これらはこれらで非常に魅力的であり、今後も人を引き付ける観光資源であり続けると信じている。しかしながら、私は今回の視察の機会を得て、知識としては有していたはずだが、図らずも改めて長崎の意味を、長崎を訪れる価値を再認識することができた。これは古くて新しい長崎の観光資源である。

地方において観光振興による地方創生を行うためには、地域全体で地域の魅力を発信し、その上で、地域が旅行者に何をもたらしてくれるのかを提供することがなによりも重要である。

今回の視察をとおして改めて認識・確信することとなった長崎の意味・価値にさらに磨いていく取り組み、あるいは情報の発信を進めることで長崎を訪れる人を増やし、共感をいただきながら、長崎の末永い活性化に資するよう微力ながら今後とも力を注いで参りたい。